情報通信審議会情報通信政策部会

イノベーション創出委員会（第16回）議事録

第1 開催日時及び場所

平成26年6月13日（金） 15時00分～16時00分
於、総務省第1特別会議室（8階）

第2 出席した構成員（敬称略）

徳田 英幸（主査）、藤沢 久美（主査代理）、浅羽 登志也、石川 正俊、
大久保 明、近藤 則子、佐々木 繁、篠原 弘道、島田 啓一郎、知野 恵子、
津田 信哉、濱田 隆徳、山本 哲也

第3 出席した関係職員

(1) 総務省

（情報通信国際戦略局）

武井 俊幸（官房総括審議官）、松井 俊弘（通信規格課長）、
荻原 直彦（研究推進室長）

（総合通信基盤局）

竹内 芳明（電波政策課長）、杉野 勲（電気通信技術システム課長）

(2) オブザーバー

田中 宏（内閣府 政策統括官（科学技術担当）付 参事官）、

下間 康行（文部科学省 研究振興局 参事官（情報担当））、

渡邊 昇治（経済産業省 産業技術環境局 研究開発課長）

（代理：浜野 敏夫（産業技術環境局 研究開発課 研究開発調整官））

田村 秀夫（国土交通省 大臣官房技術調査課長）

（代理：野口 宏一（大臣官房技術調査課 建設技術政策分析官））

(3) 事務局

田原 康生（情報通信国際戦略局 技術政策課長）

高村 信（情報通信国際戦略局 技術政策課 統括補佐）

篠澤 康夫（情報通信国際戦略局 技術政策課 課長補佐）

第4 議題

- (1) 前回議事録（案）確認
- (2) 研究開発のシステム改革に向けた取組みについて（最終報）
- (3) 最終とりまとめ（案）に対する意見募集の結果について
- (4) イノベーション創出委員会最終報告書（案）について
- (5) その他

開 会

○徳田主査 それでは、定刻となりましたので、ただいまから、情報通信審議会情報通信政策部会イノベーション創出委員会第16回会合を開催させていただきます。

それでは、配布資料の確認を事務局からお願いします。

○事務局 お手元にお配りしております資料の確認をさせていただきます。机の上、1枚目に座席表を置かせていただいております。その下に議事次第、1枚ものがございます。続いて、資料16-1、前回の議事録、資料16-2、A4横の資料で、「研究開発のシステム改革に向けた取組みの進捗状況」というものを置かせていただいております。その下、資料16-3、A4横の1枚もので、意見募集の結果をまとめたものを置かせていただいております。その下の分厚い資料ですが、資料16-4、「イノベーション創出実現に向けた情報通信技術政策の在り方 最終報告書(案)」というもの、一番最後に資料16-5、A4横で、「イノベーション創出実現に向けた情報通信技術政策の在り方 報告書(案) 概要」を置かせていただいております。過不足等ございましたら、事務局までお申し出ください。

○徳田主査 どうもありがとうございました。それでは、お手元の議事次第に従って、進めてまいります。

議 題

(1) 前回議事録(案) 確認

○徳田主査 まず、最初の議事、前回、第15回委員会の議事録(案)の確認をさせていただければと思います。資料16-1、A4縦のものですけれども、こちらに議事録の案がございます。議事録の取扱いは会議に出席した構成員の確認を得て、議事録を作成し、配布資料とともに原則として公開することとなっております。

各構成員におかれましては、事務局から電子メールによって事前に照会をさせていただいておりますが、改めてご確認いただき、修正等があれば、6月18日の水曜日までに事務局にお知らせいただければと思います。

その後、総務省のウェブサイトにて公開することといたします。よろしくご協力のほどお願いいたします。

(2) 研究開発のシステム改革に向けた取組みについて(最終報)

○徳田主査 それでは、次の議題、「研究開発のシステム改革に向けた取組みについて(最終報)」

に入らせていただきます。こちらにつきましては、前々回、第14回の委員会において事務局から現状における取組状況の報告があったところですが、その後、2か月が経ちまして、新たに進展があったとのことですので、現在の取組状況について、事務局より資料16-2に基づいてご説明いただき、その後、ご質問、ご意見を伺いたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

それでは、事務局よりお願いいたします。

○事務局 事務局より、資料16-2に沿いまして、現在までの進捗状況についてご報告させていただきます。

本日のご報告内容といたしましては、中間答申において国による具体的な取組方策ということで各種ご提言をいただいておりますが、その中でも特に「独創的な人向け特別枠」、「ICTイノベーション創出チャレンジプログラム」、この2点につきまして進展がございましたので、この内容についてご報告させていただきます。

1枚おめくりいただきまして、1ページ目でございます。まず、「独創的な人向け特別枠」でございます。こちらについては、これまでご報告させていただいておりますが、総務省が運営しております競争的資金SCOPEの中で特区的な扱いとして、特別枠を設けていくということでございます。特に「独創的な人」というところに着目して支援を行っていくというものでございまして、「[Disruptive Change]:世界的に予測のつかないICT分野において、破壊的な地球規模の価値創造を生み出すために、大いなる可能性がある奇想天外でアンビシャスなICT技術課題に挑戦する人を支援。閉塞感を打破し、異色多様性を拓く。」という大きな目標を掲げまして、これから業務を本格的に進めていきたいと考えております。

大きな立て付けとしては、スーパーバイザーという方に何人かお願いいたしまして、そういった方々に独創的な人を選んでいただく。また、「独創的な人」が研究開発を進めていく中で助言を行ったり、あるいは指導を行ったりという形で、トータルとして研究開発を進めていく。そして、この「独創的な人」が研究開発を進める上で、研究開発を支援する環境というものを整備したいと考えてございまして、こちらの詳細は現在検討中でございますけれども、クラウドネットワーク環境などバーチャル研究室環境の提供、外国著名講師によるスクール、学会イベント等の開催、そして、こういった「独創的な人」本人に研究資金を管理させるのではなくて、業務実施機関ということで、事務局でございまして、こちらに経費の支払や証書類管理といったいわゆる諸雑務をサポートしていくということで、「独創的な人」に研究開発に専念していただく環境を提供していきたいと考えております。

そして、「独創的な人」には「Ambitious Technical Goals」というふうに書いてございまして、大きな目標を掲げて取り組んでいただく。そして、評価としてはゴールの道筋が明確にある価値ある「失敗」を奨励していきたいと考えてございまして、その具体的な内容としては、これまで漠としていた実現性への道筋が明確になったかどうかということを中心に評価していくというふうに考えております。そして、失敗例の共有というものをプログラムで実現することで、そういう失敗を資産として活用していくということでございます。

対象者としましては、「大いなる可能性のあるICT課題に挑戦する個人」ということで、義務教育修了者以上の方を対象とし、そして、1人当たり300万円+間接経費でございますけれども、こういう経費で支援してまいります。期間としては1年間でございますけれども、繰り返し応募可能。採択件数は10件程度と考えております。

これまでの進捗状況でございますけれども、5月22日に事務局、いわゆる「業務実施機関」と呼んでおりますが、こちらの公募を開始させていただきました。そして、その公募を6月10日付けで締め切りまして、現在、この機関について採択審査を実施させていただいているということでございます。

こちらの公募は、皆様の中にもご存じの方はいらっしゃるかと思いますが、事務局を公募していたところ、メディアに非常に大きく取り上げていただきまして、各種新聞報道ですとか、テレビ、あるいは特にインターネットの方で大きく取り上げられております。

例えばウォール・ストリート・ジャーナルにも大きく取り上げられておりまして、英文の記事でも、いわゆる変な人というのが英語で「hen」と表現され取り上げられており、私どもの狙っているところを非常によくご理解いただいたような記事をたくさん出していただきました。

おかげさまで本事業については、事務局を公募しただけではあるのですが、大きく世の中に広まっていったのかなと考えておりまして、これを機に、この事業として狙っていただきたいような方々にこの情報がリーチして、たくさん手を挙げていただければと期待しております。そして、今、事務局の選定をしておりますけれども、選定後速やかに「独創的な人」向けの公募を開始したいというふうに考えておりまして、7月を予定しているということでございます。

また、この事業全体をプログラム評価というものを行っていきたいと考えておりまして、そのプログラム評価委員会というものを現在設立に向けて準備をしているところで、速やかに立ち上げていきたいと考えております。

また、スーパーバイザーもこの事業のかなめとなる方々でございますけれども、その候補者の選定に向けて、現在準備を進めているという状況でございます。「独創的な人向け特別枠」については以上でございます。

続きまして、「ICTイノベーション創出チャレンジプログラム」でございます。こちらは、平成26年度予算といたしまして5億円、必要経費を予算として計上しているということでございます。

ICT分野における我が国発のイノベーションを創出するため、その実現を目指して、ベンチャー企業や大学等による革新的な技術・アイデアを用いた事業化、これに向けた挑戦に対して常時応募可能な支援、研究開発費用の一部補助、こういったものを行っていくというものでございます。

そして、施策内容として、支援の対象としておりますのは、先ほどありましたけれども、ビジネス実証フェーズに取り組んでいくベンチャー企業や大学、特に事業化を狙っていく

方々というところを対象としていくというふうに考えております。

また、こういうビジネスモデル実証フェーズに取り組むベンチャー企業等を支援していく、一緒に取り組んでいくという方々として、ベンチャーキャピタル等の、いわゆる「事業化支援機関」と呼んでおりますけれども、そういった方々に一緒にチームを組んでいただいて取り組んでいただくというものでございます。

こういった取組みに対して、ベンチャー企業等に対しては上限で1億円まで、ベンチャーキャピタル等に対しては上限で1000万円までの支援を行っていくというものでございます。

また、支援を開始してから1年間の取組みということで、1年間でプロトタイプ制作ですとか、あるいはプロトタイプを作った上でデモンストレーションを行っていく。また、ビジネスモデルを磨いて、そのプロトタイプを使って、そのビジネスモデルが成立するかどうかの検証を行っていくということで、まさにこの1年間の支援が終わった後、外部の更なるリスクマネーを誘引していくという活動を展開していただくということで、それに対する補助を行っていきたいと考えております。

こちらにつきましても準備が進んでおりまして、いわゆる事務局等として「業務支援機関」「不正等監視機関」、この2つの公募を行ってまいりました。

「業務支援機関」というものは、この事業全体を実施していくにあたって、総務省の支援を行っていただく機関でございまして、例えばベンチャーキャピタルとベンチャー企業のマッチングですとか、そういったことを行っていく機関でございます。

もう一つ、「不正等監視機関」というものは、本施策は比較的出口に近いものというところがございますので、モラルハザードであったり、フリーライドであったり、そういったいわゆる不正を防止していく。あるいは万が一そういったことがあった場合、しっかり確認をしていく。そういったことを行う機関を設置しようと考えております。これらについて公募を行った結果、「業務支援機関」につきましては株式会社野村総合研究所様、「不正等監視機関」につきましては、有限責任あずさ監査法人様、この2機関に受託をいただくということとなっております。

そして、本日14時、この一次提案審査に参加するベンチャーキャピタル等の募集というものも開始させていただきました。こちらはポンチ絵の黄色いところで囲んであるところでございますけれども、ベンチャー企業を支援していく事業化支援機関の後方機関ということであり、また、ベンチャー企業からの目利きをしっかりと行っていただく、いわゆる一次提案の審査を行っていただくという機関でございます。こちらの募集を本日から来月11日まで実施することとしております。

並行いたしまして、6月下旬以降から、「革新的な技術やアイデアを用いた事業化等への挑戦の公募」、これは、常時応募可能という本施策の大きな特徴を持ったものでございますけれども、それを公募開始していきたいと考えております。

そして、本事業を着実に、また効果を高めていくような運営を実現するために、評価・運

営委員会というものを設立したいと考えておりました、こちらの設立に向けて準備を進めているという状況でございます。

また、6月下旬以降の公募を開始した際には、公募説明会を東京だけではなくて各地で実施していきたいと思っております、順次、総合通信局あるいは関連機関のご協力をいただきながら展開していきたいと考えております。

また、PoCセミナーということで、いわゆるプルーフ・オブ・コンセプト、概念検証、成功した事例というのが日本にも当然存在しますので、そういう実例を各地で紹介しながら、そしてこの施策がまさにこういったところを狙っていくものであること、また、こういう取組みが死の谷を乗り越える上で、有用なツールになっていくところを関係者の方々に周知していきたいと考えております。

進捗状況につきましては、以上でございます。

○徳田主査 どうもありがとうございました。ただいまの説明につきまして、ご質問、ご意見等はございますでしょうか。

○篠原構成員 一つ目の「独創的な人向け特別枠」に対するお願いですが、ここまでは非常にスムーズに離陸しようとしているので、喜ばしいことだと思っておりますが、私どもの組織にもかなり変わった人間がいるんですが、変わった人間というのは、結構チャレンジブルなことをやってくるので、なかなかここで話せるいい例がないんですが、例えばパーソナルデータの側面から見たときにいかがなものかとか、そういうものを非常に保守的に捉えると、彼らがやろうとしていることの芽をつぶすことになると思います。

ですから、彼らが実際にいろんなことを遂行しようとしたときに、もちろん法律に触れることはまずいんですが、法律に触れなくても、弊社の場合でも総務省さんの場合でも結構体面を気にして、これはちょっとやってはまずいよなというふうになりがちだと思うんですが、その部分をぐっと堪えて、世の中から批判が出たら全部総務省が受けるんだというくらいの気合でやらないと、いいアイデアはつぶれると思います。本当に想像もしなかったことをたぶん提案してきますので、それを受け止めるだけのご準備をお願いできたらと思っています。

○徳田主査 重要なお指摘をありがとうございました。ほかにいかがでしょうか。

1点質問ですが、①の名前に「独創的な人向け特別枠」と書いてあるんですが、これで最終決定なんですか。

○田原技術政策課長 名称の方は以前から堅いというご意見がございますので、こちらについては正式に募集をかけるときに、正式な愛称という形で、柔らかい名前を考えております。

本来ここでご紹介したかったんですが、手続の方が後ろにずれてしましまして、発表の都合上、今回ここではご披露できないんですが、そこについては柔らかい名前を、事務局としては柔らかいと思った名前を考えておりますので、6月末あるいは7月上旬くらいまでに発表できるようにしたいと思います。

○徳田主査 ありがとうございます。ほかに、ご質問、コメント等ありますか。

非常に皆さんのご意見が反映されて、いい枠組みでスムーズにテイクオフする直前まで来ておりますので、うまくテイクオフしていただけるといいかなと思います。どうもありがとうございました。

(3) 最終とりまとめ(案)に対する意見募集の結果について

○徳田主査 それでは、次の議題「最終とりまとめ(案)に対する意見募集の結果について」に移らせていただきます。前回の委員会の後、5月27日から6月6日にかけて、意見募集、パブコメが行われまして、個人の方2名を含め4者からご意見の提出がありました。

提出していただいた意見とその意見に対するコメント案を資料16-3にとりまとめておりますので、まずは事務局より資料について説明をしていただき、その後、本委員会の対応をまとめてまいりたいと思います。

それでは、事務局より説明をお願いいたします。

○事務局 資料16-3に基づき、ご説明申し上げます。

先ほど主査からご紹介がございましたように、5月20日に開催しました第15回の本委員会でご提示させていただきました最終とりまとめ案について、いろんなご意見を構成員の方々から頂戴いたしましたので、それを含めて修正したもので、5月27日から約10日ほどでしたけれども、パブリックコメントに付させていただきました。

結果、先ほど主査からご紹介がありましたように、団体1、メーカー1、個人2からご意見を頂戴してございます。

頂戴したご意見を簡単にご紹介させていただきます。表でございますけれども、ご提案者のお名前、実際の最終とりまとめ案のどこに相当するご意見なのか、そして、実際に頂戴した意見というものを全て書かせていただいております。

一番右側にあります「コメント(案)」というものにつきましては、本委員会として頂戴したご意見に対してどう考えるかという部分でありますので、こちらについて皆様方からご議論いただき、ご了解を頂戴できれば、「(案)」が外れるということでございます。

提出された意見等について一つ一つご紹介させていただきます。

まず、1番目でございます。プロジェクトについて研究開発をやるだけではなくて普及促進という戦略が大事になってくるということで、ユーザー等も含めた形での開発実証が行えるような中間的な開発環境へのサポートが有効であるというご意見で、飛び抜けて優れた環境若しくは実証試験環境というものをとりまとめ案に書かせていただいておりますので、基本的に賛同のご意見というように捉えさせていただきます。

下の段も先ほどのものとほぼ同じでございますけれども、テストベッド等の構築というものを多様な者へ広く開放しというご意見でございましたので、これも同じく基本的に賛同のご意見というふうに書かせていただいております。

3つ目でございますけれども、同じようにテストベッド系のお話で、社会インフラの維持

管理サービス技術というものについてしっかりやっていくべきというご意見をいただいております。こちらについても基本的に賛同のご意見というふうに認識しておりますが、頂戴したご提案で特定の商標が出てきておるという関係もございまして、そちらについては報告書に書くことはしないというふうに書かせていただいております。

4番目、レジリエント向上ICTサービス技術ということで、災害に強い街づくりというようなことがございますが、こちらに対して、極端な気象に対してセンサーネットワーク技術を活用して対策するべきではないか、そのための実用化研究を促進することが必要ではないかというご意見をいただいております。また、その下でございますけれども、犯罪等の人為的な脅威についても、そういった形で取り組むべきではないかというようなご意見もいただいております。

これらについて、まず、上半分の部分につきましては、先ほどの3番目と全く同じで、基本的に賛同のご意見、そして、特定の商標等は記載しないというふうに書かせていただいております。最後の段落の犯罪対策の部分でございまして、こちらについては参考意見という形で対応させていただければというふうに考えております。

5番目につきましては、5章、6章に書かれているプロジェクトというのが大事だということを書いていただいておりますので、賛同のご意見とさせていただきます。

6番目でございまして、若干飛んだ意見でございます。基本的に、法令というのは合理的にできていて、機械処理が一番楽なものなのではないかということで、それを理解して適切に処理できる「ロボット役人」というものを開発すべきではないかというご意見をいただいております。こちら、「ロボット役人」という言葉はともかくとして、それ以外の部分については基本的には中に既に包含されているものと思っており、参考意見として承りますとさせていただきます。

7番目は、イノベーションを起こすのは若者であるということで、いろいろと書いてありますけれども、最後の段落に「未来は全て若者に任せることであり、老人は引き下がるべきである。」というご提言を頂戴してございまして、こちらについては参考意見とさせていただきます。

○徳田主査 ありがとうございます。

ただいまのご説明に対してご質問等ございますか。よろしいでしょうか。

特にクリティカルなコメントなどは返ってこなかったという理解でよろしいでしょうか。

○事務局 はい、そう認識しております。

(4) イノベーション創出委員会最終報告書(案)について

○徳田主査 それでは、本日メインの議題、「イノベーション創出委員会最終報告書(案)について」に移らせていただきたいと思います。前回ご議論いただきました最終とりまとめ案とパブコメの結果を踏まえて、本日、最終報告書案を作成しております。本日はこちらの資料に

基づきご議論をいただき、本委員会としての最終報告をとりまとめたと思っております。

なお、本日の議論の内容を反映したバージョンを作成し、6月23日月曜日に開催される情報通信政策部会での最終報告を予定しております。その後、まず政策部会での議論をしていただいて、その結果を踏まえて、6月27日金曜日に開催予定であります、情報通信審議会 総会において最終答申とさせていただきます予定です。

まず、事務局から資料16-4に基づいて説明をいただき、その後、議論をさせていただければと思います。それでは、事務局から説明をお願いいたします。

○事務局 資料16-4に基づきましてご説明を申し上げます。今、徳田主査よりご紹介ございましたように、こちらでございますが、前回、5月20日に開催させていただきました第15回の会合においてご議論いただきました最終とりまとめ(案)から、今度、基本的には表紙を変えただけという形でございますけれども、最終報告書(案)という形にさせていただいたものでございます。

こちら、本日ご議論いただきまして、そのご議論を踏まえて、修正したものが、「(案)」が取れて最終報告書ということになり、6月23日に開催する情報通信政策部会の方に、徳田主査よりご報告いただくという予定でございます。

そこでの議論を踏まえ、今度は部会報告という形に差し変わりまして、最後、総会で、6月27日にご審議いただき、それで妥当とまとめられれば、今度は最終答申という形になるという位置付けの文書でございます。

表紙をおめくりいただきまして、目次がございます。前回いろいろご議論いただきましたけれども、流れ自体は一切いじっておりません。ですので、第15回のときから差し変わった部分を主にご紹介させていただければと考えております。

そうしますと、ずっと飛びまして、28ページでございます。28ページの「3.4.1 アイデアを創発する飛び抜けて優れた環境の整備」というところでございます。こちら、前回いろいろご意見を頂戴いたしまして、表題のところを若干直しております。

あと、2段落目、「即ち」から始まる段落でございますけれども、誰もが使えるということ、若しくはあらゆるものにつながるということまでは書かせていただいていたんですが、何でもできるということも大事だというご指摘をいただいていたので、「誰もが利用可能で、あらゆるものにつながり、あらゆることを試すことができ、コストやスピード、利用可能な情報量、使いやすさなどが飛び抜けて優れた環境」という形で、求めるスペックを若干上げて書かせていただいております。3章関係の修正点は以上でございます。

続いて、4章でございます。32ページ4.1.2の①で、もともと「人材を応援するチーム」と書いておりましたが、誰が応援されるのか表題だけでは分からないというご指摘をいただきましたので、「挑戦する人材を応援するチーム」という形に直させていただきます。4章で大きく直したところは以上でございます。

続きまして、5章でございます。39ページ1行目の括弧書きの中でございますけれども、いわゆるダイバーシティという考え方の中で、もともと「女性・高齢者」までしか書いてお

りませんでしたけれども、ここに「障害者」を加えさせていただいております。

あと、2段落目、「同時に」からの段落でございますけれども、もともとこの段落には健康を支えるということしか書いてなかったんですけれども、2行目後半でございますが、「情報バリアフリー技術の発展・普及による」云々と、また、最後の行でございますけれども、「就労や健康を支える」ということで、対象及びできるようにすることというのを増やさせていただいております。

続きまして、43ページ、「5.3 2030年に求められるICTサービス像」ということで、冒頭のところについて、もともと「5.2節に述べた社会像をICTの観点から総合的に勘案する」としか書いてなかったところですが、目的意識がないというご指摘もございましたので、「多様なサービスや情報を、希望する若しくは必要とする全ての人に、適切かつ的確に提供するために」いろんなことが求められる社会と考えられる、というような形で書かせていただいております。

続いて、46ページ、5.4でございます。こちらは、前回のご議論の中で、個別の技術があるのはいいが、最後のサービスにつながるところがちゃんとしていないのではないかなというようなご議論をいただいたかと思っております。ということで、図の上の方でございますけれども、「⑥ サービスの構築」というブロックを追加しております。これに伴って、図の上にありますように、①、②、③と書いてあるところに「⑥サービス構築技術」というものを挿入させていただいております。

それに伴いまして、50ページ、「5.4.6 サービス構築技術」というセクションを追加させていただいております。こちらの中身ですが、「多数のサービスを組み合わせによる豊かなサービスの構築」として、「前節までに述べた様々な技術により、多様なサービスを実現することができるが、それらサービスの一つ一つは極めて単純なものであり、一般の利用者が使いこなすのは容易ではない。このため、多数のサービスを組み合わせ、まるで一つのサービスであるかのような有機的なサービス連携を実現する、統合的なサービス環境が実現する。また、これらにより、多様なサービスや情報を、希望する若しくは必要とする人に、適切かつ的確に提供することで、豊かなユーザーエクスペリエンスの提供を実現する。」ということを書き加えさせていただいております。

こちらの部分、前回の会合以降、構成員の方々からいろんなご提案をいただきまして、それを我々の方で足し込む形で、このように書かせていただいております。

あと、当然、サービスの構築にあたってセキュリティということが絡んでくるんですが、そのセキュリティの部分については、次節5.4.7に包括的に書いてあるという考え方で、セキュリティ関係のことについてはこのサービス構築の中には書いていないという形にさせていただいております。

それに伴いまして、52ページにあります図5-9の下の技術のブロックダイアグラムについても、同様の修正を加えております。

あと直させていただいたのは59ページの図6-1のブロックダイアグラムでございます。

図の下のところにいくつか縦の箱がございますけれども、その中に「災害被害の最小化」と書かせていただいております。こちら、「災害のない社会の実現」と書かせていただいておりますが、それは言い過ぎではないかというご指摘をいただいたので、修正させていただいたという形でございます。

5章については以上でございます。

こういった形で、実際にパブリックコメントにかけさせていただいたところ、修正に及ぶ意見は出てこなかったということで、基本的には実際にパブリックコメントにかけさせていただいた版を委員会報告としておとりまとめいただければというふうに考えておる次第でございます。

また、資料16-5は、この最終報告書案をパワーポイントにまとめたものでございます。実際に主査から部会等にご報告いただく際には、恐らくこちらをお使いいただくということになるかと思っておりますので、構成についてご説明させていただきます。

表紙をおめくりいただきまして、1ページ目が「検討経緯」ということで、諮問を受けて以降の経緯を書かせていただいております。2ページ目は、諮問時の部会資料でございます。諮問時に我々総務省の側からこういったことをご検討いただきたいという形でお願ひしたときのペーパーを付けさせていただいております。3ページ目が構成員の一覧でございます。一部、フォントが化けてしまっていますので、そちらは後で修正したいと思います。4ページ目が「イノベーション創出に向けた現状の課題と解決の方向性」ということで、今回の報告書の2章、3章を1枚の紙にまとめたものがございます。5ページ目が「イノベーション創出の仕組み」ということで、4章を1枚のパワーポイントにまとめたものを付けさせていただいております。

6ページ目、これは若干参考ということになるかと思っておりますが、今日ご報告させていただいたような中間答申を受けた取組というのが実際にこういうふうに進んでいるということをご報告させていただきます。続いて、7ページ目が今後取り組むべき技術課題ということで、5章を簡単にまとめたものを付けさせていただいております。同じく8ページが5章全体に関するものになります。最後、9ページが「国が取り組むべき技術開発分野と具体的プロジェクト」ということで6章全体を1枚にまとめたものを付けさせていただいております。

それ以降、文字で書き起こしたものが10ページ以降ということで、先ほどの資料16-4の各章を1枚ずつ、言葉で落とし込んでいくとこんな形になるのかなということで、要約版を付けさせていただいております。ご説明は以上でございます。

○徳田主査 どうもありがとうございました。

前回の委員会で説明がありました最終とりまとめ（案）から、皆様からいただいたご意見を踏まえまして、2030年に求められる要素技術、46ページの図の5-8をちょっと見ていただきますと、事務局の方で一番上のレイヤーにサービスの構築技術というのを追加させていただいております。

それから、要素技術の追加に伴って、報告書の別紙部分に「⑥サービス構築技術」の欄を加えております。これはかなり細かな作業だったのですが、頂戴したご提案を基に各マスに記述を追加で記載していただいております。こちらにつきましては、今回初めて皆様にご覧いただく部分となりますので、特にご意見をいただければと思っております。

それでは全体を通しまして、先ほど説明していただいた最終報告書（案）について、ご質問又はご意見等ございますでしょうか。よろしくお願いたします。

○近藤構成員 一番最後のところの59ページの図というのが、恐らくいろんなところで紹介される図になると思うんですけども、「高齢者が明るく元気に」という言葉があって、「ICTスマートタウン」とありますので、もしこのところに「スマートプラチナ社会プロジェクト」みたいなのが入るのであれば、駄目かなと思いつつ、言ってみます。

○徳田主査 どうもありがとうございます。ほかにいかがでしょうか。

前回もかなりご議論いただいているので、差分の部分を見ていただいて、コメントをいただければと思います。

○藤沢主査代理 内容はすばらしいので、何も言うことはないんですけど、言葉の使い方だけ、2か所指摘させていただきます。例えば44ページの5.3.1の内容ところで、「高齢者をはじめとして、誰もが」と書いていただいたので、最初のタイトルは「高齢者が明るく元気に生活できる」ではなくて、「誰もが明るく生活できるスマートプラチナ社会」の方がよいのではないかと思います。

あと、もう一つ、差分のところ、39ページの一番上で「障害者」という言葉があるのですが、障害者の「害」はひらがなに開いていただけると、いろいろとよいのではないかと思います。とても細かいことですけどよろしくお願いたします。

○近藤構成員 関連して、今の5.3.1のところの「誰もが」とおっしゃっていただいたのはそのとおりですけども、スマートプラチナ社会というのは超高齢社会に対応する総務省の会議ということで昨年からはやっているんで、この場合はたぶん「高齢者」を残していただいた方がよろしいのではないかと思います。

なぜかという、誰もがということは大事なんですけれども、とりわけ少子高齢化は切実だということのメッセージだと理解しております。

○事務局 今の「障害者」の文字のところなんですけれども、基本的には漢字にするかひらがなにするかは、国が持っている公文書の用例で決まってくるので、そこを確認して、それに合わせる形になるかと思いますので、ご要請に応えられない可能性があるということだけご留意いただければと存じます。

○藤沢主査代理 お任せいたします。

○徳田主査 ほかにいかがでしょうか。

○浅羽構成員 細かいところですが、5.3.1の「高齢者が」のところについて、「高齢者も」というふうにしたらどうでしょうか。

○近藤構成員 おっしゃるとおりだと思います。

○徳田主査 ありがとうございます。

些細な点で「てにをは」的で恐縮ですけど、60ページの「おわりに」のところの第2パラグラフの4行目、「具体的手段の確立に確立に向け」とあるので、「確立」を1個取っていただければと思います。

前回いただいたコメントの部分等も確認していただいて、現バージョンでよろしいようであれば、このバージョンを上の部会の方に持っていきたいと思っておりますが、いかがでしょうか。もう少し見ていただいた方がいいですか。

多くのいただいたコメントは今回の最終報告書（案）に盛り込まれておりますので、今、いくつか構成員の方からご指摘があった言葉遣いのところは直させていただくということで、ほかに大きなところでございますでしょうか。よろしいでしょうか。

それでは、まだ読み入っていただいている構成員の方もいらっしゃるようですが、一応、今日いただいた主に「てにをは」に関する部分の方は、私と事務局の方でもう一度読まさせていただきます。先ほど冒頭で申し上げましたけれども、6月23日月曜日に開催予定の、この委員会の上に当たります情報通信政策部会で、私より最終報告を行わせていただく予定でございます。

その後、政策部会での議論を経まして、6月27日に開催予定の情報通信審議会 総会において、最終答申を受ける予定となります。

それでは、最終報告書（案）の修正に関しましては、私の方にご一任いただけますでしょうか。もしもお帰りになりまして、何か致命的なものがございましたらメールで一両日中にご連絡いただければと思います。どうもありがとうございました。

(5) その他

○徳田主査 それでは、最後にその他の議題に入らせていただきます。事務局より説明をお願いいたします。

○田原技術政策課長 主査からございましたけれども、最終報告書案につきまして、ご確認いただいて、もし「てにをは」を含めて、何かご意見がございましたら、できますれば来週月曜日中くらいまでに事務局の方にメール等で頂戴できればと思います。

今後のスケジュールでございますが、先ほどもございましたが、6月23日に情報通信政策部会、その後、6月27日に情報通信審議会 総会の開催を予定しておりますので、その総会で最終答申をいただきましたら、その旨を速やかに報道発表をさせていただく予定しております。以上でございます。

○徳田主査 ありがとうございます。ただいまのご説明について、何かご質問、ご意見等ございますか。よろしいでしょうか。

どうもありがとうございます。

それでは、本日の議題は以上で終わりとなりますが、全体を通じて何かご意見等ござい

すか。よろしいでしょうか。

それでは、本日、第16回で、構成員の皆様方のご努力で最終報告書案まで来たわけですが、本日の会合をもちまして、本委員会につきましては最後ということになりますので、武井大臣官房総括審議官より、一言ご挨拶を頂戴したいと存じます。よろしく願いいたします。

- 武井総括審議官 最後に一言ご挨拶を申し上げたいと思います。イノベーション創出委員会の報告を無事にまとめていただきまして、本当にありがとうございました。心から御礼を申し上げます。思い起こすと、この委員会が始まったのが昨年1月で、1年半もということだったわけですが、かなり、最近の役所の検討としては長時間かけて16回もご議論いただき、大変に充実したご議論を賜ったというふうに思っております。

昨年の中間答申のときには、主にどうやって進めるかということで、破壊的イノベーションのための「独創な人向け特別枠」、あるいは「ICTイノベーション創出チャレンジプログラム」ということで、中間答申をいただきましたけれども、今日ご紹介いただきましたように、今年度の予算に無事にまとまりました。

実は、議論を聞いているときに、これは本当に役所の予算にできるのかなと、やや我々も不安だったわけなんですけれども、何とか「変な人」ですとか、格好がついて、先ほど紹介したように、某新聞社様に非常に取り上げていただいたら、ものすごく評判になりまして、もう既にライティングの申請も来て、ちょっと待ってくれと言っているんですけれども、逆に、今までこういうことが求められていながら、なかなか実現できなかったということが、ある意味で皆様のご議論の中から本当にできたのかなということで、うれしく思っております。

今日参上できませんでしたが、大臣も大変「変な人」を気に入ってくださいまして、やっぱりこういうことが要るんだよねということで、評価をいただいております。

また、昨年の中間答申も、「ICT成長戦略」ですとか、あるいは内閣府の「科学技術イノベーション総合戦略」、あるいは「日本再興戦略」というところにも反映をさせていただきましたし、また、本日おまとめいただいたこの委員会の報告につきましても、先行して、総務省の中の「ICT成長戦略推進会議」、徳田先生と藤沢先生にご参加いただいているわけですが、中身はどんどん出していって、「スマート・ジャパンICT成長戦略」という中の研究開発パートということで、盛り込みをさせていただいております。

また、現在も内閣府で「科学技術イノベーション総合戦略2014」の議論が進んでおりますけれども、その中にもいろいろと、オブザーバーで来ている内閣府を通じて反映をさせていただいております。そちらの方も、今度の2014の原案で、これまでICTという位置付けがあまり科学技術戦略、総合科学技術会議の中では手段のステイタスになっていて、去年のイノベーション総合戦略を見ても、あまり明示的に情報通信というパーツがなかったんですけれども、やはりそれではということで、今度の2014年度版では、他の「ナノテクノロジー」や「環境技術」も含めた形で、分野横断技術ということで、改めて明示をいただく形になりました。

今回、イノベーション創出委員会としてまとめていただいた内容などもかなり反映をいただいて、ICTということで、ここから競争基盤技術としてやっていく部分になるものとして位置付けられるようになったのかなと思っております。その意味で、大変この委員会はいろんなところに反映しつつあるなと思ってます。

やはり本命は、今度の27年度予算にどういう形で反映できるかということですが、これは私ども事務局の方がこれからしっかり中身を受け止めて、政策として組み立てていくということになるかと思えます。精一杯頑張っていきたいと思えますので、是非また皆様方のいろんな形でのご支援、ご協力をお願いできればと思っております。

改めまして、徳田主査、藤沢主査代理はじめ、委員の皆様にご挨拶申し上げます。御礼の言葉とさせていただきます。本当にどうもありがとうございました。

○徳田主査 ありがとうございました。私のほうからからも一言だけ。

私もいろいろ主査を仰せつかるんですけど、16回、これだけインテンシブにしごかれた委員会ということで、非常に記憶に残る委員会となりました。各構成員からいただいたいろいろなアイデアが先ほど資料16-2で説明いただいた「独創的な人向け特別枠」、それから「ICTイノベーション創出チャレンジプログラム」ということで、2つの非常に記憶に残るプログラムがスタートできたというのは、非常に皆様のおかげだと思っております。

まだスタートだけですので、是非、横からでも縦からでも下からでも応援していただければと思っておりますので、どうぞよろしく願いいたします。本当に長い間ご協力いただきまして、ありがとうございました。また、総務省の事務局の方も寝ずにいろいろ資料を作っていただいて感謝しております。

開 会

○徳田主査 それでは、これにて閉会とさせていただきます。どうも長い間ありがとうございました。